



いた古い暖簾のイメージとは違い、暖簾に新しい魅力とサインデザインの意味を生み出していました。

加納さんが制作を受けた当初は、デザインに関心を持つ人がなく加納さんがデザインの全てを任されていたのですが、お互い暖簾をかけることや、隣近所の暖簾を見ることで、各々自分の家のしつらえを考えた思いやデザインの要求が、住民から出る様になりました。今加納さんの役目は、人々の要求したデザインを形にする職人に徹しているそうです。人々の思いや、デザイン力が高まることで、自然発生的に住民自発の町づくり意識が高まり、1996年には住民組織「町並み保存事業を応援する会」が発足しました。この経過を経て、今は勝山の町づくりの母体となっている組織は、NPO法人勝山・町並み委員会です。運営は地元の企業人や住民らで組織されています。町内の旧家から寄贈された老朽化した明治時代中期の醤油蔵を改築して造られた地域交流センター「勝山文化往来館ひしお」が活動の拠点となっています。館内では多種多様な文化・交流活動が展開されています。国内外の芸術家を招きアーティストインレジデンスや作品展、音楽会、住民団体

による多彩なイベント活動、保存地区内の空き家の管理運営、暖簾の町づくり事業などです。現在「ひしお」には、年間1万人以上の人々が訪れるそうです。

秋の勝山の伝統的な行事「喧嘩だんじり」に対し、10年ほど前から始まった、町並み委員会企画の春の「雛祭り」は、160軒余の民家・商家の軒先に思い出深い雛人形が飾られる大きな行事の一つです。昨年は4万人と観光人気もとみに高まっていますが、目的は観光振興の町おこしではなく、あくまでも住民の生活に主体をおいて、人々が子供の未来、町の未来を見据えて、みんなが自分の考えや楽しみ方を表現できる自分丈の企画を大本としておられ、出来る所から無理をせず、人に押し付けず、コミュニケーションを楽しみながら淡々と生活の一部としてやっているという加納さんの言葉が印象的でした。このことが、順調に永く発展的に続けてこられた要因かも知れません。また加納さんは暖簾が縁で出来たこの住民の意識と活力以外に、城下町であり文化的基盤を持っている、町の構成が集合して家が並んでいる、市が事業に興味を持ち協力的であり、こまめに結果を検証し評価している、年齢的に40代から60代が中心に活動していて町の規模も調度良いなどを、町が持っている町おこしの良い条件としてあげられていました。加納さんの今後の計画は、空き家になっている所に、勝山に来て自分の思う物を創れる職人を呼びたいと熱く語っておられました。

加納さんのお話を聞いて、忘れかけていた人間が積み重ねて来た自然な日常の暮らしの大切さや楽しさが伝わってきて、彼女の家庭から地域、日本、世界、宇宙への大きな愛情を感じました。人類の始まり以来布は衣食住の様々な生活の場面で人と関わって来たことで、人類が感知する布に対する永遠のいとおしさは、布という切り口で始められた暖簾制作を喚起させ、何人にも馴染みやすく活動の大きな流れとなったのではないのでしょうか。これこそ「布の力」だと実感することになりました。

(奈良平 宣子)